令和４年度第３回鎌倉市青少年問題協議会　議事概要

【日　時】令和５年２月８日（水）14 時 00 分から 16 時 00 分まで
【場　所】鎌倉青少年会館　２階大研修室

【出席者】敬称略
（１）委員　９人
　　別紙名簿のとおり。
（２）事務局　４人
　　小林課長、山下職員、渡邉職員、西田職員

【資　料】
（１）講演会アンケート結果
（２）青少年の居場所について～考え方、今後の方策・方向性～

【議　題】
（１）講演会「わたし」の居場所」について（報告）
（２）青少年の居場所について
（３）青少年の市民委員委嘱について

概要については以下のとおり。
（１）事務局挨拶
　・青少年課長の挨拶ののち、鎌倉青少年会館の紹介を行った。
（２）講演会「「わたし」の居場所」について（報告）
　・事務局から、講演会の報告及び参加者からの感想や意見を紹介した。
（３）青少年の居場所について
　・事務局から、令和４年度に取り組んできた内容を報告し、今後の方向性について説明をした。
（４）青少年の市民委員委嘱について
　・事務局から、令和５年８月から、市民委員に青少年を委嘱することについて説明をおこなった。
（５）来年度のスケジュールについて
　・事務局から、来年度の青少年問題協議会の日程について説明した。
　　各委員からのご意見、ご提案は次のとおり

【「わたし」の居場所講演会質疑応答】

加藤会長：令和5年1月28日に鎌倉商工会議所の地下ホールで講演会を開催した。行かれた方は分かると思うが、会場の雰囲気が温かかった。手作りの大きな木をくりぬいたところに「わたしの居場所」と書いてあって、周りに松の枝をつけたりして、舞台の足元には明かりがずっとついていたので、雰囲気は温かく感じた。そんな雰囲気の中、講演会が始まり、小林課長から全体の流れの説明の後、全体進行を、「特定非営利活動法人鎌倉てらこや」を中心にまとめていらっしゃる上江洲さんという方にお願いした。この方は、放課後かまくらっ子も推進部会委員として一緒にやっていただいている。上江洲さんの進行で、場の雰囲気づくりのために、初めに隣の人同士で自己紹介をした。すぐ話が始まらないのではと思っていたが、鎌倉の風土だろうか、みなさんがすぐに打ち解けて、1～2分の予定だったが、全然止まらなくて、まだ続けたい人が多かったということもあり、もう1分延長するということもあった。参加者も熱心な方が多かったと思う。明石さん（鎌倉、逗子で活躍されている方）と私と、日下部さん（28歳くらいの、12年間引きこもっていた人）が登壇し、話をした。当日の参加者は70数名ということで、今日の資料の中に講演会の感想をまとめたものがあるので、ご覧いただきたい。中には、はっとさせられる言葉もあったので、いくつか紹介していきたい。例えば1番の、「子供を主人公に」や「いつでもやり直せる」、「学校に行かなくても死なない」など、とても印象に残ってるようで、その他も皆さんたくさん感想をいただいた。また、3番目に「若い人にもっときて欲しいなと思った」、「日下部さんの体験談はとても良かった」、「よく勇気を持って出てきてくれた」とあり、なかなか当事者が話をすることは少なかったと思うのでこのような感想だった。それから4番目の方は、今は中学2年生だが、「娘が小学校のいじめで悩んでいます」といただいた。また、14番目の方は、「40才すぎの息子を持つ母親です。半引きこもりの状態で仕事はしてません」とあり、最後に「日下部さんに心の内をお話いただきたいと思いました」といただいた。初めから終わりまで全文読むことは大変だと思うが、何か感じた、あるいは当日参加された委員のお二人の方からも感想いただいて、話をしてみたいと思う。川島委員いかがか。

川島委員：自分は参加させていただいて、とてもいい講演会だったと思う。やはり安全にいられる場所と、そこでの出会いがすごく大切なんだと改めて感じた。

林委員　：講演会の話の中では、子どもが自ら学び笑おうとする力を引き出し、自分が主体的に色々なものを見つけて、自分で勉強していくためには笑顔がなくていけない。そのためには、学びの中で教えることはもちろん、笑顔になれるものを教師が引き出さないといけないということを切実に感じた。

居場所について、問題協議会でもどういう居場所を作っていけば良いかという協議をしているが、今回の講演会を聞いて、居場所というのは、時間でもあるし、

気持ちでもある。どんなに立派な建物ができても、そこに流れる時間や相手を思いやる気持ちがなければ居場所は作れないと実感した。それをまさしく実感したのは、加藤会長がおっしゃったように、講演会の最初に隣同士で会話をしたことで、講演会のあの時間が居場所になっていたため、参加者の皆さんがリラックスして色々な話ができ、とても心地良く、あっという間の時間を過ごすことができたのだと思う。

また、教育委員会の定例会でも報告したが、最後に明石先生が「相談」という言葉は、「相互談義」という4文字からくる「相談」でその相互の「互」が抜けているというお話をされて、なるほど、子どもが相談してきても、「でもね」と話を切ってしまう大人がいて、互いに聞いて、聞いてということをしていかないと相談にはならないということを勉強させていただいた。これからの先生達に伝えられたらと思った。日下部さんには心を打たれた。

加藤会長：講演会の日、日下部さんと帰りは一緒に帰ったが、来るときは緊張してたとのこと。どんな人が聞いてるかわからないし、何の話をするんだと言われてしまうのではないかと思っていたが、とても気が楽でそのままで話ができたと言っていた。会場に入ったときに雰囲気が柔らかい感じで安心できたので、そのままで何も飾らずに話すことができた。自分も役割があるんだと思って、嬉しかったと話をした。彼にとっても、ありがたく、また鎌倉に時々来ようとも言っていた。参加されなかった皆様もせっかくなので、感想や気づいたところなどいただければ。気づいたところだけ挙げさせてただくと、26番目の方は、日下部さんの話を聞いて、「引きこもっていた時間の中で蓄えたエネルギーの大きさに感動しました」と書いてあった。日下部さんは、「12年間引きこもってたからこそ僕自分と向き合えたんです」と言っていた。また、30番目の方は、「支援員の居場所をぜひ作ってください」とあり、相談にのっている方が、やはり詰まってしまったり、どうしていいかわからないときに、その人たちの居場所、話ができる場所、相談ができる場所、そういうところが欲しいということ。32番目の方は、「BGM、お花、折り紙など、会場全体が温かい空気で包まれていてとても素敵な時間でした」とあり、会場の雰囲気があって、話が展開したと思う。あとは、37番目の方は、「今年1月より、障がい者向けグループホームを鎌倉市に設置しました。障害者が心地よく暮らすらせる住まいを作りたいと思っております」と、このような事業をやってらっしゃる方も参加された。そして41番目の方は、「わたしの居場所」というタイトル、これがとても良かったといただいた。当初のタイトルは「若者の居場所」だったが、日下部さんも一緒に打ち合わせをした際に、「若者の居場所、居場所を作ってる人の方が主人公みたいで、僕達がお客さんなっちゃうみたい」とのことから、どのようなタイトルがいいですかと聞き、「わたしの居場所」だったらといただき、打合せに参加していた他の方もこれがいい

となり、「わたしの居場所」に決定した。42 番目の方は、「肩の力を抜いて活動を作ろうと改めて思いました」とある。同様に 49 番目の方は、「日下部さんと話がとてもしみました」と書いてある。やはり当事者の声を聞くことができたということが、今回の大きな成果だと思う。53 番目の方は、「目で合図や会話ができていた」という部分、家族間でも言葉が出ない時があったが、話していたと日下部さんが言っていた。そこから勇気をもらったのだと思う。60 番目の方は、日下部さんの言葉にあった、「当時の自分と向き合っている」部分が心に響いたとある。日下部さんは、「自分もひきこもっていたが、自分と向き合いながら自分と話をしてるような気がする」と、これがとても深く心に染みたとのこと。大まかにですが、気になったところだけ挙げました。事務局からも何か感想があれば。

小林課長：会場の飾りについて、舞台上に大きなリースを作り、その周りに紙で作った鳥を立体的に広がるように釣り下げた。また、舞台前面の足元にはキャンドルに見立てた LED ライトを、紙で作った器に入れて並べた。開始前は ギターの BGM を流しながら、少し薄暗いけれども、温かいところに入ってきていただくというような演出とした。その演出を考えたのは鎌倉青少年会館、本日の会場となっている施設で勤務している職員 2 名で、日頃から工作等を得意とされている方で、放課後かまくらっ子でも講師として子ども達に教えていらっしゃった方なので、会場装飾を考えてほしいとお願いした。足元のキャンドルの器も、作る際には放課後かまくらっ子の子ども達と一緒に作ったもの。

ＢGM も音楽も職業としている青少年課の会計年度任用職員に、選んでもらい流した。

加藤会長：色々な工夫をされたことを今伺ったが、とても温かい雰囲気の中だったので、みんなが一つに溶け合うような雰囲気になっていたと思う。参加されてない方お話があれば。

千代委員：参加したいと思ったが日程が合わず、残念だった。お子さんにももっと参加して欲しい等様々なご意見があったが、青少年課から周知いただいて、ということだったが、どういう方々にお声掛けをしたのか。

小林課長：市内中学校と高校、委員の田中校長先生にもご協力をいただき、学校から生徒に向けて配布した。中には学校からもらったチラシを見て参加した方も何人か見られた。もう少し学生にも来てほしかったが、保護者の方が中心に来てくださったのかと思う。学校以外は、いろんな子ども達のために居場所をはじめ、施設を運営している事業所の方にお知らせをした。その他、市の所管施設職員や、放課後かまくらっ子の関係事業者や職員の方に連絡をし、市役所庁内は掲示板を、教育委員会経由で小学校の先生方にも周知をした。あとは登壇者である明石さんが、ご自分のルートでいろいろ声をかけて下さった。

加藤会長：千代委員からお話があった、これからもう少し人数を増やそうというときに、場

所は何か考えがあるかとあったが、今後はいかがか。

小林課長：アンケートの中にも、またやってほしいとあり、直接ご意見としていただいたこともございました。令和５年度に関しては、この講演会の予算は、要求していないため、今のところ予定はしていないが、今回の講演会の記録をとらせていただいているため、講演会録として整えて、登壇者の加藤会長をはじめ、ご了解を得た上で、公開ができたらと考えている。また、登壇者の日下部さんをはじめこの内容で公開して良いかと了解をとらせていたただき、皆様に見ていただけるような方法をとりたいと考えている。

加藤会長：今回、初めての実施でうまくいくかどうか不安だったこともあり、最大 100 人弱ぐらいの規模で実施したが、またこのような計画があれば、当事者の方も参加できるといい。本当は鎌倉の市内の方が当事者として登壇できれば良かったが、逆にいろいろ負い目を追ってしまうと大変なので、そういう意味では市外から当事者の青年が来たのは良かったと思う。今回の記録を取って、皆さんに読めるような形で渡すということで、進めていただきたい。また、これからの企画等も、この後の居場所についての話を少し踏まえて、どのような形で実施したらいいか検討していきたいと思う。

では、次の議題「青少年の居場所について」を、事務局から、説明いただきたい。

～事務局説明～

【青少年の居場所について質疑応答】

加藤会長：たくさんあるので見るのが大変でだが、整理をしていく。成人式のときにとったアンケートと、中高生にむけてとったアンケートを分析し、その分析した最後のところにまとめがある。ページでいうと 50 ページから。もう 1 回整理をしてみると、50 ページのところの考察 1 の「自宅や学校等の居場所感」というところについて。中高生の回答のおよそ 4 人に 1 人、40 人学級の場合は 10 人が学校に居場所感を感じていないという。これは前からも指摘があるが、学校に居場所感を感じないという生徒が中高生で結構いるという。まず一つは学校をどうするかというところからだと思う。次にその下の、「ありのままの自分/新しい人等との出会い」というところは、どういうところに居場所感を求めているか、心地良い居場所とはどんなところかということを聞いている。中高生だと 1 位がリラックスできる、２位が好きなことができる、3 位が素でいられるという回答。この 1.2.3 で見ると、自由にありのままの自分でいられる場所がないということだろうかと思う。いつもどこかで緊張している。そういうことが読み取れる。そのため、下の丸の二つ目が、「リラックスできる、素でいられる場所を求めている」という回答が非常に多い。それから次の 51 ページで「もう一つの居場所」

というのはどういうものかというところの回答は、丸の一つ目で中高生のおよそ3人に1人、40人学級だと13人から14人が、家や学校以外で安心して過ごせる場所がないという。3人に1人ということは、多くの子供たちが学校や家以外のところに居場所がないと回答している。学校や家以外の居場所をどうしたら作っていけるか、これが大きな課題。そして、その下の丸の、「今の自分が好き」や「今の生活に充実している」、「将来の夢がある」という子供たちは居場所を感じてる子が多いという分析。だから居場所を持ってない子たちの居場所が必要ということ。まず最初は、そのあたりの課題から進めていく。いろいろ感じたことや意見など、今後どうしたらいいかとか、あるいは質問があれば。

田中委員：ちょうど今の高校3年生は、入学の時にコロナ渦でひと月ほど学校に来れなかった学年にあたる。今年になり、3年ぶりになにかができたと言えることが増えてきたが、2年前、今の高校3年生が高校1年生の頃は学校行事が全くできない状況だった。1年生のときに経験がないから2年生になって、ようやく制限つきで始められ、3年生になって自分たちがメインで下の1、2年生を引っ張っていこうとするときに、やっぱり何もない中で、教員たちも間があいた中でやり始めなけなければいけない状況で、本当に今年は結構苦労しながら、なんとか色んな行事が通常通りに開催できた。これからどのようになっていくのかわからないが、新型コロナがインフルエンザ並みになったらまたいろんなことをやるのかなと思っているが、まず、マスクで素の顔が見えなかったので、マスクをとると誰だっけというような、生徒たちも全然違う印象になる。ただ、結果的には4人に1人が学校に居場所を感じていないことや、3人に1人が学校以外で安心して過ごせる場所がないという結果には結構ショックを受けているので、まずは学校生活そのものをどうしたらいいのかなということを学校自体が考えなくてはいけないのかと思う。やはり、学校行事などは、それぞれの生徒が自分の意見をぶつけ合い、そういう中で社会的スキルが磨かれていき、成長していく。そういうことができない中で少しつまずいたときにその立ち直り方がわからないとか、周りをどう助けていいか分からないということがあるようなので学校としてはそこをフォローして、情報交換を密にしていくことが重要なのではないかと思う。

加藤会長：やはり新型コロナの影響は、学校側から見ても相当大きい。これから第5類にかわるという話なので、少し楽になってくるとは思う。学校の関係者だけでなくてもどういうふうに方向性を持っていけばいいかというところである。

林委員　：小学校でもやはり給食がまだ黙食で、全員が前を向いて食べている。特に、小学校3年生までは給食というのは、前を向いて静かに食べるものと指導されているため、昔みたいにおしゃべりしながら食べて、そこを居場所にするということが全くない。この体制が小学生で基本になって中高へ、となっているので、小学

校もこれから考えていかなければならない。
「マスクを外すようになったらどうしますか」という街頭インタビューを見ていたら、半分の女の子は「もう外さない」と回答していた。新型コロナで仕方ないといっても、そこは社会と一緒に学校も考えていく必要がある。

加藤会長：当然学校でも、今現在、色々な工夫をして行事を増やそうとしていると思うが、一応、子供たちがリラックスしたい、素のままでいられる場所が欲しいという傾向が出てきている。家と学校だけではなく、もう一つの居場所がないと3割の子供が言っていることが、51ページのところではっきり出ている。

幅委員　：今の先生方のお話を伺うと、やはり小さい小学生の意見もすごい聞きたいなと思う。私には大学生の息子がいて、4年間の大学生活のうち3年間は家だった。でも、家にいることが逆に楽だと言っていた。前回の会議のときに、鎌倉学園の高校生の方がいた。彼の意見を聞いたときに、私もはっとさせられたことがある。私達は居場所を作ってあげたいと考えているが、彼に聞いたらリラックスしたい、休みたい、常に自分たちは戦ってるから疲れてるというふうに言ったことが、私も衝撃だった。結局、このアンケートを見ても、家や学校以外で安心した場所がないと書いてあるが、逆に言うと家や学校は安心できると考えたりもできる。私は息子を見てると、家でいることで、今回コロナ渦で家族のありがたみがわかったり、家での居心地の良さを逆に感じたりという時間がかなりこの3年間多かったので、家は居心地が良くて安心して、自分が素でいられてよかったみたいな言い方をした。もちろん外で友達と交流することもたくさん必要だと思うが、今本当にいろんな子が世の中にいて、いろんな考え方の人たちがいるのでなかなか価値観が合う子を見つけるのが実は難しい時代になっている気がする。いろんなSNS 、いろんな媒体がある中でいろんな苦しみを今の現代の子たちが味わう、なにか疲れる社会みたいな。私達大人がなかなかそこに追いつけなくて悩みに応じてあげられない部分を、私自身は親という立場だが、悩む日々が結構ある。こんなに疲れてるんだこの子たちはということを、逆に親も実感させられたようなこの3年間。家がまず居場所であるならば、そこはまず私は逆に安心してしまったが、これはまた少し違う意見かもしれない。

加藤会長：子供も緊張していて、疲れている、もしかすると親も同様。家の中でリラックスできたり学校でリラックスできているという面もあるが、逆に先生方も緊張してたり疲れてたり、親も仕事がうまくいかないで緊張して、そうすると、家の中も学校の中もお互いが緊張してしまっているということもあると思う。

東樹委員：ある意味で世の中の選択肢が広がった気がする。自分が子供の頃は、学校かそれ以外かみたいな感じだったような気がする。善し悪しは置いて、ネットの空間、あとは鎌倉の場合は自然が豊かなので、私の子供は小、中学生ですが、山の中、あとは梶原にある冒険遊び場、ここへ行ってる子供たちも結構いる。

加藤会長：確かに選択肢が広がった。だから狭まったっていう感じもあるが、逆に今まで行かなかったところに行けるとか、ネットだとか、あるいは自然の中とか、そういう面も出てきた。だから、色々と子供たちが工夫してるところはあるかもしれない。

千代委員：ちょっとひねくれた言い方で申し訳ないが、先ほどの幅さんの意見に少し近いが、この聞き方と質問の仕方が、ありますかと、居心地の良い場はどんなところですかとか、ありますかということで、「あること」を前提に聞いている。前回もそういう話をした。「あること」を前提にしていて、「全然そういうことを必要と感じていません」、「必要ないです」というような、困ってませんというような選択肢がない。お子さんたちがどう思っているのか、いまいちはっきり出てきてないのではないかと思う。幅さんの母親としての意見のように、居心地が良いと回答している数字、安心して過ごせる居場所が「ある」が 65%、「いいえ」が 34%。私は意外に大きい数字だなと思う。それだけの子供たち、中高生が居心地よく、安心してられるというのは、捨てたものではないなというふうに思った。34%に照準を合わせて考えていくというのはどうなのか、もう少し深く考えていかないと行けないのではないかと思う。

加藤会長：今の意見を聞いていかがだろうか。こちらは先入観で、困ってるのでどこかに居場所を作ってあげようというふうに設問を作ってしまったかもしれない。でもわりとと満足してますよという、この回答をどう理解するか。先ほどの話にもあったが、このあたりの意見はあるだろうか。今とても重要なご指摘を受けている。我々はマイナスのことだけで考えて、どこかにいい場所を作ってあげましょうと思い込んでいるのかも。つまり、家庭そのものが落ち着いてくるとか、あるいは学校の中自体が改善されていて、その 34%をもう少し広げていくための色々な工夫があって、学校も居場所として落ち着いてくるとか家庭も落ち着くというような。そういうリラックスできる場所で変わる可能性も、ある意味でどう作れるかということも一つある。そういう意味で言うと、お父さんお母さんが安心できるような空間作りが子供たちに影響してくるのか、あるいは先生方がリラックスできるような余裕が出てくると、子供たちの居場所になるのかもしれない。

東樹委員：重要な視点だと思う。例えば公園なんかもそう。遊具があればいいかではなく、子供たちは何もないところでも自分たちで工夫しながら作ったりすることができる。ボール 1 個あればボールがなくても布でボール作ってサッカーをしたり野球したり。それと同じだろうと思う。

千代委員：学校の中でも先ほど話があった、給食を食べるときグループ作って 4 人で食べて、そういう場でもその 4 人で楽しい話をしながらご飯が食べられればそれはそれなりに居場所だと思う。これをやってないからあの子はかわいそうだとか、そういうこ

とではなくて、やはりその中に居場所というのが出てくるであろうし、おそらくそれが見つけられないのならば、それなりのサポートしてあげないかなと思うが。そういうことを考えてあげる必要がある。

加藤会長：ここでもう１度これからの方向性を作っていく。今のはとても大事な指摘だと思う。マイナスにしてしまうのではなく、その中でそういう場所をどうやって作れるか、作っていけるか。子供たちも大人たちも一緒に作れるということを頭の片隅に置きながら、先に進めていく。次のページへ行って今後の検討方法ということで、53 ページから。居場所作りということで、方策としては、おすすめの書籍や情報コーナーの設置、学習センターの連携強化、環境を重視していくということがここに記されている。これがその次のページの 54、55 ページのところにいくと、もう一つの居場所ということを市は考えている。それが、先ほどから出ている３人に１人が、（課題とニーズのところにある）安心して過ごせる場所がないという、ここをどうしていくか。その中にこの青少年会館もある。青少年会館の中高生の利用率が非常に低いという現実もある。これをうまく活用すれば居場所になっていくのではないか。方策としては、鎌倉青少年会館の環境改善に向けたヒアリングを少ししたらということ。つまりこの場所を子供たち、若者たちが自由に利用できるにはどのようにしていけばいいかということで、そのヒアリングや意見を聞いて進めていくという、この調査をきちんとやっていくというのがまず一つ。今度はあまり先入観を持たないでいろんな質問した方がいいと思う。どんなことがここにあったらいいかということ。そして、検討の方向性が３つあり、青少年会館の環境改善に向けたヒアリングにも基づいて、その環境の改善、つまりここの環境でこんなことが欲しいというものを見つけ出すということ。それから公共施設を利用した中高生がもう一つの居場所というのをもう１回作ることを検討してみてはどうかということ。3 つ目が放課後や休日に自由に活用できる、利用できる自主的な活動の交流の場、実現できるユースセンターみたいなところ。ここはユースセンターという位置づけに変わってくることがあると思う。それから次のページ、「様々な居場所と連携協働・利用支援」ということで様々な法人や団体が運営してるところを市が居場所事業者と連携していくことで、何か新しい方向が出てこないだろうかということ。それで方策として、55 ページの下の方に、フリースクール等の居場所を利用する方への支援ということに踏み込んでいる。フリースクールというのは、学校になかなか行けていない子供たちが行くところ。そのフリースクールの運営には、スペースや何かを借りたり利用するときにお金もかかる。そこの経費の一部を補助するというのはどうだろうかという考え方。居場所として、これをもう少し活用しようということ。それからもう一つは、「日本財団子ども第３の居場所事業者への協力」というか、その援助を受けながら、連携していく。ここまでのところでいか

がだろうか。これについて、市の方から少し説明をお願いしたい。

小林課長：既に１月末頃に、松尾市長から来年度の予算の記者発表ということで、このことが一部新聞などにも取り上げられている。不登校児童生徒は市も県だけでなく、全国的にも増加傾向である。鎌倉市はこれから、2 月の議会が始まったので、来年度の予算が審査されるところである。一方で、不登校特例校を教育委員会で考えているとのこと。青少年課の方で令和 5 年度考えているのが、フリースクールに通っている方の、月額利用料の一部を補助するということ。予算の議決がされないことには、なかなか制度の詳細が設計ができないので、まだはっきりとしたことは申し上げられない。予算としては月額の利用料の 3 分の 1、上限 1 万円を補助するというようなことを考えている。会長から、もちろん施設を運営する側もお金がかかるし通っている側もやはりお金の負担経費がかかっているという話があったが、こちらで考えているのは利用者の方への支援。

加藤会長：子ども達の居場所に、学校家庭それ以外のいろいろなところがあるが、その中の一つとして、フリースクールのような居場所を。お金がなく、なかなか通うことができない家庭に対し、利用料金を補助していく。3 分の 1 ぐらいとかあるいは 1 万円上限ぐらいということで今検討されてるが、このあたりのところでいかがか。子供たちへのヒアリング、ユースセンターの設置、自主的な活動の場、他団体との交流、こういうことがあって、フリースクール等の居場所について、この辺が出てくるが、いかがだろうか。

石井委員：フリースクールじゃなくて、54 ページの（２）に中高生のもう一つの居場所のところについて。そこに検討の方向性というところがあって、三つほど書いてあるが、その件で少し意見がある。中高生のもう一つの居場所というところで、検討の方向性で三つ書いてあるが、この公共施設等を利用した中高生のもう一つの居場所の損失について、これは今がチャンスかなと思う。今度深沢で新しく市役所が建設する方向で動いているので、そういう新しい施設とか、またそれに伴って旧庁舎になる今の庁舎。あそこの利用についても今検討段階に入ってるかと思う。フリーにいろんな人が居場所に使えるという案は出ているかと思う。鎌倉青少年会館でもいいが、今の庁舎は駅前ですごく利便性がいいので、例えば、夜 9 時ぐらいまで安心安全でいられる場所であるならば、学習とか、学習じゃなくても数名で集まって話し合う場とか、何かそういうフリーで使える居場所というのを作れるとなったのがチャンスかなと思った。藤沢市役所で会議があってよく行くことあるが、そのときに藤沢市役所の新しい本館、そこの 5 階にエレベーターで上がる。フリーのソファーみたいなものがあってそこで子供たち青少年が歓談してることもあるし、そこのフロアのところの一室があり、そこでは壁に向かって机が並んでいて、勉強している。そういう姿をよく見るのでそういうのがいいかなと思う。駅からも近いし。夜間に使えるのなら、改めてその

青少年会館ではなくても、これから新しくそういう今色々な意見が出て、利用計画なども進んでいるかと思うので、是非いいかなっていうふうに思った。

小林課長：青少年課は実際、そこを考えて案を作っていく所管課ではないが、随所で意見を言える場があるため、これまでも多世代が利用できるスペースみたいな計画が多かった。そこにできれば若者ぜひ使ってもらいたいという、若者をターゲットに続くターゲットにした居場所ということについても、意見を出していきたい。

加藤会長：こういうことを検討していくといいと思う。あるいはいろんな団体で、例えば施設で、一部を地域の子供たちにも開放するというのができてもいいと思う。またいろいろ市から援助してもらうだとか。こういうことができるといい。他にいかがだろうか。

林委員　：ユースセンターとか若者ターゲットという話をしているので、どうしてもアンケートも若者対象になっていると思う。先ほどの話を聞いてると、家庭の人たちはどう思ってるのか、学校もどう思っているのか、アンケートとるまでいかなくても知りたい。家庭の事情でどうしても家庭が居場所になりにくい、こういうところがあったらいいなと思っている家庭もあるかもしれない。また、学校の現場を知るものとして、居場所が学校にないからどんどん他に居場所ができていくというのも何か寂しく、力のなさを感じてしまうと同時に、できないことについては、こういう子にはこういう場があるといいなという意見をどこかで吸い上げられたらもっといいのかなと思う。使う子だけのニーズで考えていくのではなく、周りで見守っている人たち、特に家庭や地域、学校の人たちからのニーズも考えていきたい。この前、学校保健大会というものがあり、歯医者から見る虐待というテーマの話のなかで、養育環境のリスクという言葉があった。それは何かというと、家庭での夫婦喧嘩、相手の悪口、子供の話を聞かない、子供の意見を無視する、といった環境が虐待に繋がるということで、そこには青少年や子供たちにとっての居場所がないということになる。色々な立場の人からの声もどこかで拾えるといいと思う。

加藤会長：つまり若者たちだけというのではなく、それに関わる家族の方とか学校から意見を聞いてもらうと、通常とまた違ったものがまた見えてくるかもしれないという。もし今後アンケート取るときに工夫してみたらどうか。大変だろうが、連携していき、あまり数多くしないでもいいし、あるいは青少年問題協議会にて、今度アンケート取るときにそういうところまで含めて話し合ったらいいかもしれない。

川島委員：少し関連して前回も少し触れたところがあるが、やっぱり子供のそれぞれの状態像っていうのが、ニーズが個々にいろいろあると思う。やっぱり居場所で休みたい子はそれこそヨギボーみたいなゆっくり時間をリラックスして過ごすのが必要なお子さんもいると思うし、さっき言われてた学校の先生方とかご家庭で、親

御さんとかがすごく忙しいので、それぞれのところで在宅支援であったりとか地域包括で子供、障害、高齢者から含めた支援サポートというのをそれぞれ考えられていくといいなと思う。前回の居場所の講演会でも話があったかと思うが、子供にとっては出会いと体験っていうのが、地域と繋がることになるのかなって思ったときに、やはり一つ、学校を選ばなかったお子さん等に関しての学習の保障をするという場合に、不登校特例校新聞記事を見ていると、中学校に行かなかったお子さんが学校に戻ることを目的とせずに、成長を育成していくっていうところなので、トライアンドエラーでいろんな体験ができたり、いわゆるその地域資源のネットワーク化がそこにあって、それを知ることができる。知って体験ができる機会のコーディネートのプラットフォームが必要なお子さんもいるのかなと思う。家庭によってはやはり 15 歳義務教育を終えて、社会に出ていくという、生活の保障ということを考えていくときにそういったトライアンドエラーみたいな職業体験も含めて、何かないと自分が生きていくということをどう考えていけばいいのかな分からないと思う。

加藤会長：色々なものがこれから必要になる。一人一人子供は違う。全部同じところでここでやればいいよというふうにはいけないので、そのニーズに合わせて対応できる場所を学校にも家庭にも地域にも様々な団体に作っていかなくてはいけない。フリースクールへの、支援ということについて、ご意見はあるだろうか。

東樹委員：すごい良い方策だなと感じている。実際、フリースクールに行きたいが、家庭の事情によって、行けていない子供もいる。フリースクールも経営上、ある程度月額 3 万から 5 万ぐらい取らないと成り立たない。もちろん人数制限もある。可能性を広げられるきっかけになるかなという感じ。同時に、日本財団の子供の第３の居場所事業への協力について。実際にこれの取り組みをしている方々が知り合いにいるが、市内外で、法人の方々とお話をする中では、これを活用していきたいんだけども行政との連携であったり、民生委員の方々との連携だったり、この事業が取れたとしても、経営出来なかったら意味がないとおっしゃられていた。

加藤会長：やっぱり地域の方も含めていろいろ機関、行政、一緒になって取り組んでいくということが重要。これは何かの結論を出すということではないが、今の意見も大事にしてもらい、方向性を出していただくということをお願いしたい。最後のページの追加 56 ページのところに、担い手となる青少年の育成の中とある。いくつかあるがその方策の中に青少年問題協議会の市民委員として、青少年を委嘱したらどうかという提案が出ている。前回の高校生のように、今度はそれを正式な形でこの中に代表として入ってもらうという提案だが、この提案について青少年課から説明いただきたい。

小林課長：鎌倉市の子ども・若者育成プランの二つの柱の一つが、地域の担い手のなる青少

年のための居場所。どちらも切り離して考えるのではなく、それぞれ被りながらというところだと思うが、地域の担い手となる青少年育成のために、子供たちとか青少年が、自分たちが関係する施策に対しての意見を表明していく。この度、こども家庭庁が 4 月から始まるが、子供基本法の中にも子供の意見を取り入れるということがしっかりと取り入れられている。実は鎌倉には、子ども子育て会議という会議がある。その中にも、子供の委員を委嘱している。青少年問題協議会においても来年度は 1 名を予定しており、一緒に意見を言って青少年の施策に対して審査審議に参加をしていただきたいと考えている。

加藤会長：ページは 56、 57 のところ。居場所作りをするということと同時にもう一つ担ってくれる若者たちを育てるということの一つに、その子供の意見を尊重しようということ。そしてこの委員会の中にも青少年の代表を委員に入れるということ。もう一つは、次の 57 ページに放課後かまくらっ子中高生参画について、中高生あるいは大学生が担い手として参加してくるということが記されている。まずは、この委員を入れることについていかがだろうか。

田中委員：これから具体化されていくと思うが、どのように委員を選んでいくのか。

小林課長：公募をして手を挙げて下さる方がいるかどうかはまだ未知数。ぜひご協力をいただけるようであれば、高校の方からもアドバイス等をいただけると助かる。

田中委員：やはり地域の担い手となるという、鎌倉市に住んでいる高校生とか大学生とかだろうか。

小林課長：市民委員なので市外の方ではなくて、市内の方を委嘱したい。

田中委員：県でも神奈川県知事に会いに行くとか、県政のその現場を見に行こうとか、あるいは県民として意見を言う高校生の集いみたいな、募集がかかることはあるが、なかなか手が挙がらないのが現実。結局、生徒会役員の子とかにお願いすることになる。今回、枠が 1 名ということで、何人も手をあげてくれたとしても、全員は難しいと思う。よく考えて公募を進めていくべき。

加藤会長：あるいはその子ども子育て会議で、すでに 3 人程子どもが参加しているということで、そことの繋がりもあってもいいと思うし、それでその鎌倉市内の中学生高校生大学生も入ってその辺で何かサークルみたいなものができて、自分たちでこういう活動をしていこうっていう人があれば、それをみんなで選んでもらって推薦が上がってくるだとか、高校生だって中学生の中から出てくるとかは、いきなりは難しいと思うけども。そういう母体がまた出てきてもいい。

東樹委員：鎌倉の NPO センターに、最近の高校生とか若者のグループが増えているようなので、そういうところに声かけをしてもいいかもしれない。 NPO 法人で、防災で頑張っていた子たちもいる。

加藤会長：鎌倉市内でいろんな青少年が活動してるところと繋がっていくと、そこでのメンバーの中から自薦他薦が上がってくるという、そういうのがいいと思う。その結

果をまた皆さんにまた伝えていく。みんなで意見を言いに行きたいからここに来て、何人かで発言するとかということも起こるかもしれない。

千代委員：今の市民委員ということだと、委員が一人だとしても、その一人が、フィードバックして、高校生たち自分の仲間たち、いろんなグループからさまざまな意見持ってきてもらうということを、きちんと前提としてやっていく形が重要。

加藤会長：公募は大体 4 月頃か、もう少し経ってから始まると思う。

最後にもう一つ、かまくらっ子への中高生の参画ということだが、こちらはどうだろうか。方策としては、鎌倉には現在、かまくらっ子が 16 ヵ所ある。5・6 年生になると参加者が少し少ない傾向にあるが、中学生や高校生が来てくれるとその子たちがみんな元気になる。かまくらっ子に来てくれる中高生を今募集して参加してもらっている。かまくらっ子を卒業した人が、中高生になったりして、また関わってくれると、その子が結局鎌倉全体のリーダーになっていくのではないか。そういうことを全体として見通しながらやっていったらどうかなということで、特に体験活動だとか、様々なプログラムを見るとみんなで活動することにより、いろんなやり方を子供たちも覚えていき、社会人になったときにまた次の活動に繋がってくということ。

千代委員：地域で色々な方々に参加していただいて、その地域中で色々なことを考えて、子供たちを育てていこうということで始まった放課後かまくらっ子。かなり地域性の強いものだなと思っていた。ただ、西鎌倉のかまくらっ子はちょうど新型コロナの影響で、その地域の人たちが関わらないままスタートしてしまったということがあり、実際に見せていただくとことを提案した。実際に見るとすごく楽しい企画がいっぱいある。

そもそもスタートするときに、地域としては、当事者の子供たちの子供運営委員というような、子どもたちがどんなことをやりたいかとか、どんなことを考えてみたかということで反映できるような形にしたいということを西鎌倉の要望として話してきた。でも結局はそれが全然ないままいってしまっていた。この青少年問題協議会の市民委員もだが、かまくらっ子でもぜひ子供たちの意見が反映されるような、運営協議会に参加できなかったとしても、子供たちの意見が反映できる、そういう場をぜひ作ってもらいたい。中高生小学校の高学年だけでなく、必ずどこにも子供たちの参加があるといいと思う。

加藤会長：かまくらっ子はそういう方針で来てるため、なかなか少し不十分なところもあるかもしれない。そこを膨らませながら、でも中にも中高生まで繋げられると非常にいいなということで、進めていきたいと思う。今日、全体としてはこんな提案があったということで、中身を精査して、段々作っていただきたい。

若木委員：子供との関わり合い方とか、地域の子ども食堂などとどういう風な関わりをしていくとか。行政方針だからしょうがないとは思うが、そういう視点を入れたほう

がいいのではないか。それから、いろんな系統の方向性があるが、いつごろまでにやるのか、そういう視点を入れた方がいいのではないだろうか。

加藤会長：子ども食堂については、管轄が違うのだろうか。

小林課長：あまり管轄が違うというようなことは申し上げたくはないところではあるが、青少年課の立ち位置としては子ども食堂とかはいままでやってきていない。どこがやってると言い切るのが難しい。どこがというのがないのが現実。いろいろ食材フードドライブであるとか、そういったことで、ここにご尽力いただいている団体さんであれば生活福祉課というところが窓口。フードドライブの視点で言えば、環境。無駄にしないという面からもやっていたりもするが、子供食堂については、所管がないので導入や記述が出来ないまま、今課題として受け止めさせていただく。いつまでにというような意見ももっともだと思う。予算に反映ができたものについては方策案としてできるだろうと、方策案として提示した。検討の方向性のところはなかなか予算の措置ということであるため、申し訳ないが、いつまでにということがなかなか言えない状況。

加藤会長：とても大事な指摘。子供の居場所ということを考えると、子供の遊び場も含めて、子供食堂なんかも、あるいは子供たちの学習塾なんかも、すべて含めていろいろ目配りしなくてはいけないと思う。この辺をどういうふうに生かせるか。今後の課題としていく。

幅委員　：青少年という話をしているが、身体障がい者、精神障がい者である方も青少年の中に含んで考えているのかというところが大きいかなと思う。もし一緒であるならばかなりいろんな意見がありそう。対応していかなくてはいけないのではないか。引きこもりの話もたくさんあったが、その中でももしかしたら精神疾患をかかえている方、障害がある方もかなりいると思うので、そういう人も含めると、かなりいろんな視点からの話があるから、やっていかなくてはいけないと思う。

加藤会長：子供たちが様々な意味で、不利益とか困難を抱えてる。そこに障害とか精神的なこととかも含めて当然あると思う。そういう子供たちを支えていくということも含め、どういう方法がいいかということを入れ込んだ方がいいかなと感じる。ただここでは引きこもりを軸にしていたと思うが、やはりそれをその原因と考えると、今のようなことも、他の子たちと少し違ってできないことがあるので苦しいだとか、そういうことがあると思うので、その障害を持った子供たちも含めて対応していくということを少し検討してみたらどうか。これも大事なことだと思う。ここでは今すぐできないが、今後、今日ここでいろいろ出していただいた意見を踏まえて、方針を青少年課の方で作ると思うので、その報告をまた私達も聞きながら、さらに意見を少し出していくというふうにまとめたい。

東樹委員：今のお話に少し関連して、そういう点でいくと、例えば外国人はどうかという視

点もあるのかなと思う。多文化共生みたいな。

加藤会長：当然、外国人の子供たちも鎌倉にいる。障がい者を含めて。このあたりの問題にも目配りしていただいて、一緒に入れ込んで、その子たちの居場所もどう作っていくかというところも、他機関とか他の部署とも協力しなければならないこともあると思う。そういうことも含めて、青少年課に課題として入れていただくとありがたいと思う。来年度の方針に向けて、事務局の方から説明をいただきたい。

小林課長：既に説明をしてしまったが、問題協議会に新たに青少年の市民委員を委嘱することについてご確認させていただきたい。

加藤会長：来年度から青少年の代表を入れるということについては決定でいいだろうか。そのやり方については、先ほどたくさんの意見が出たので、皆さんで一緒に工夫してやっていくということで。おそらく、このことはまだ、他の自治体でもやっていないこと。大事なことが来年度にスタートすると思うが、次年度以降、またよろしくお願いしたいと思う。

若木委員：今のこの条例の中で、第3条第2項第7号のところに、条例改正は大変だと思うが、青少年の代表ということで、市民ではなく青少年っていう言葉を入れるといいのかなと思う。市民のままでもいいと思うが、青少年という言葉を入れると、より明確になってくるのかなと思う。大変だと思うが、事務局でも検討いただければ。

加藤会長：この辺は行政の方で判断すると思う。

小林課長：次回の来年度の第一回目は6月上旬ごろを予定している。
また、開催日などにつきましては改めて、調整をしてからお知らせをさせていただく。

加藤会長：新しくこども家庭庁もできている。鎌倉としては、着実にこの路線にいく。今日も色々な話が出ているため、これも一つ一つ受け止めながら、子供たちの居場所作りをテーマに続けていきたいと思う。

小林課長：来年度は子ども・若者育成プランの中間見直しの年になっている。今回、居場所についての考え方というのは子ども・若者育成プランの下に位置している。変化をさせながら対応していくというようにしているので、令和5年度についてはその今後のプランの見直しを考えているので、年4回開催を予定している。よろしくお願いしたい。

加藤会長：それでは、鎌倉の子ども・若者育成プランの見直しの時期だということで、その見直しの協議をしたいと思う。

以上